

Letters Arpak

レターズアルパック

VOL.226

ISSN 2432-5295

萌え

CONTENTS

◆【萌え】…01～04

・萌えるハル・輝クイノチ・萌黄句の鎧着て・アウトドアギアを使う・車好きを通して「コンセプト」を考える・アスパラガスに萌える・私の萌え(?)・タイルの魅力にハートがずきゅーん!

◆今、こんな仕事をしています…05～08

◆お知らせ…08

◆事務所だより…09

◆近況&イベントのお知らせ…09～10

◆まちかど…裏表紙

・火を囲み、人の輪が広がるまちの広場

萌え

「萌え」という言葉ほど世代や興味・関心により受け取り方に違いが生まれる言葉も珍しいのではないだろうか。草木の芽吹きを連想する人（伝統派）、アニメやゲームに登場するいわゆる萌えキャラを連想する人（ヲタ派）、お気に入りのかわいいモノを連想する人（モノ派）、都市と関連づいたものとして工場萌えや団地萌えなどを連想する人（都市派）など。

草木の芽吹きじゃない、「萌え」の概念も実は古く、枕草子が起源だという説もあるようです。「かわいい」も同じですが、その感覚は何となく理解できているつもりでも言葉でうまく表現するのは難しいタイプの概念です。

さて、本号への寄稿文もそれぞれに違う「萌え」が表現されています。どうぞご覧ください。

レターズアルパック編集委員会

萌えるハル・輝くイノチ

三輪泰司：名誉会長

皆さん、生まれて最初の記憶は何でしょう？お母さんのオッパイ？乳母車？

初めての記憶

味噌屋のセガレの私は、後継ぎにと、生まれてすぐから祖母に育てられました。祖母はもう57歳でしたので、乳母がいましました。ある日、乳母の実家へ連れられたのです。草の上に座らされ、ヤッコラサと立ち上がった、目の前が、いちめん、マツ黄色でした。菜の花畑だったのです。1歳8ヶ月くらいでした。うか。これが強烈な最初の記憶です。それから「黄色」が気に入って、グリコより森永キャラメル箱に手をだすのです。

「八瀬」のはじまり

それは、八瀬の里でした。「ハタのウバ」と呼んでいたおばちゃんに久しぶりに会ったのは中学3年の夏、祖父が亡くなったお通夜の席でした。「マア大きくなって」と抱きしめられました。髪の毛の「椿油」の匂いをおぼえていました。ハタというのが苗字なのか、地名なのか、判らないのですが、保育事業団を立ち上げ、八瀬保育園の亀先生に「こんなところがある」と教えられさっそく、嵐山保育園の藤本先生、光林保育園の嶋本先

生、まこと幼稚園の坂口先生と見に行きました。「そうだ、八瀬でなければならぬ」と感じたのです。

なぜ八瀬か

その昔、禁裏はじめ、公卿の家では、男女を問わず、子どもを八瀬へ里子に出していたそうです。土地の子らと一緒に野山を裸足で駆けまわっていたのです。お公卿さんというとなよなよしているように思われていますが、マツリゴ

トの世界は厳しい。ボケーとしてはおれないのです。身心を鍛えていたのです。園長さん方は、それぞれ由緒あるお寺さん。このことを、知っておられたでしょう。禁裏御用の味噌屋も知っていて、真似をしたのです。

チカラの源

子どもの日々生長するエネルギーはすごいのです。ここは、パワースポットです。聖地です。子どもたちは、草木や虫やけものこともよく知っています。

栗を拾い、茸を探します。猿や鹿もお友達です。

続くイノチ

今年、八瀬野外保育センター50年です。「八瀬」へ行ったことのある子どもは、延べ何十万人になるでしょう。今や、社会の中堅です。

世の中は変わるでしょう。デジタル化、グローバル化はもう進んでいます。変わらないのは、誰でもみんな、子どもであったことです。



萌黄匂の鎧着て

杉本健太郎：建築プランニング・デザイングループ



道端で見かけた田起こし前の田んぼに咲く菜の花

平家物語と言えば、冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす…」は有名ですが、「萌」と聞くと、「敦盛最期」の場面を思い出します。萌黄匂の鎧を着た平敦盛が、海へ逃れようとするところを源氏方の武将、熊谷直実と呼び止められ、討たれるエピソードです。直実は、息子ほどの年齢に見える敦盛を泣く泣く討った後、腰の笛に気付き、明け方の管弦の音は、敦盛たちであったと分か

り涙したという悲しい場面が描かれています。萌黄色について調べてみると、春先に草や木の葉の萌え出る緑の色といわれ、若さを象徴する色ようです。船上の「扇的」を見事に射落とした那須与一も萌黄緞の鎧を着ていました。平家物語では、萌黄色の鎧を着た若武者二人が、一方は笛を奏でる悲劇の美少年として描かれ、もう一方は無名で小兵の若者が義経の前で見事に大役を果たすという何とも考えさせられる対照的な表現となっています。さて、私は、この草木の葉の萌え出るような緑色が好きですが、「萌黄」をキーワードに調べてみると、「萌黄の館」という建物が北野（神戸市）にあり

ましたので、訪ねてみました。萌黄の館は、1903年にアメリカ総領事ハンター・シャープ氏の邸宅として建てられ、1980年に国の重要文化財に指定されています。木造2階建てで、1987年からの修理で下見板張りの外壁は建設当時の淡いグリーン色に復元され、公募により現在の「萌黄の館」の名称になったそうです。中に入ると、廊下や部屋の壁のあちこちが淡いグリーン色で塗られており、木造の洋館の雰囲気そのまま、近代の映画やドラマに出てきそうでした。



萌黄の館 外観

アウトドアギアを使う

藤田始史：都市・地域プランニンググループ

「萌え」と言われて私が思いついたのは、アウトドアギアでした。今我が家では、一般的にはソファが鎮座する場所にヘリノックスというブランドの折り畳みチェアがあり、食事をするテーブルには Byer of Maine のロールテーブルを使っています。何も知らない人が見たら、「アウトドア大好きな人なんだな」って思われるような室礼です。実際にはキャンプすることもないインドア派ですが。

初めてアウトドアギアを購入したのは、10年ほど前のことです。当時京都の古い町家に住んでいました。町家の冬は極寒で、朝起きたら息が白い。室温がマインナスになることもザラにありました。「このままでは家で凍え死ぬ」という思いから、購入したのがナンガというブランドの寝袋でした。ショップの店員さんが「冬山に行かれるんですね。すごいですね。」とキラキラとした目で話しかけてきて、バツが悪くて適当にやり過ごした記憶があります。マインナス15度まで耐えられるというその寝袋を手に入れて、寒さにこごえていた夜が眠られるようになりました（普通のことですが）。折れたためば掌におさまるような小さなギアで、環境がこんな



に変わるのかと驚きました。

この時を機に、少しずつアウトドアギアを買い集めるようになりました。アウトドアギアの機能的でスタイリッシュで、それでいて「自分の仕事しかできませんが」と言い出しそうな無骨な感じが気に入っています。今では休日に、わざわざシングルバーナーでコーヒーを淹れ、モラナイフでハムを切り、オリーブのまな板に盛り付ける。そんな生活をしています。日常の中に「わざわざ」を入れることで、当たり前のことが当たり前でなくなるような、新鮮な一日になるような感じがするのです。

暖かくなったら、太陽の下で、買い集めたギアを使ってみようと思います。まちの見え方が変わるかもしれません。

車好きを通して「コンセプト」を考える

太田雅己：地域再生デザイングループ

学生時代にレンタカーで脱輪してしまい、それ以降は乗らなくなっていました。このコ罗纳禍で公共交通機関を避けて車を利用することが多くなりました。これまで車は「移動の足」としか見ていませんでしたが、様々な車を利用する中でそれぞれにコンセプトがあることを知りました。

例えば2000年代初頭に登場したホンダのフィットは、「パーソナルMAX」というコンセプトを掲げ、小さなサイズで何でもできることを目指したそうです。コンパクトカーとして安く売るために広さや利便性を省略して犠牲にするのではなく、内装のレイアウトを大きく見直すことで居住性を画期的なまでに広げ、生活のあらゆるシーンに「ぴったりフィットする」車を実現してヒットしました。

このように企業は常に新しい価値を考え続けてチャレンジしており、コンセプトを知りテーマに共感すると、欲しい・乗ってみたいという気持ちが湧いてきます。（「ファンになります」）。コンセプトを知った上でその車をカーシェア等で借り、実際に乗って体験することが最近の楽

しみになっています。

そしてまちづくりにおいても、コンセプトを考えることは同じだと考えていました。テレワークが普及し、どこでも仕事ができることで、住む場所を自由に選択できるようになりました。地方都市では人口流出が免れない中で、より持続的に生き残ることができるのは、ファンが多く、地域に積極的に関わる人が多いまちだと思います。



アスパラガスに萌える

植松陽子：サスティナビリティマネジメントグループ

初春の季語に「下萌」ということばがあります。早春、去年の枯草の下に隠れるように芽が生え出ること、春の訪れとともに草木の生命力を感じられることばです。

さて、我が庭のコンクリートに囲まれたほんの小さな植栽帯で、毎年春の訪れとともに、数年前に植えたアスパラガスがニョキニョキと顔を出します。冬の終わりの寂しげで雑多な空

間に、愛くるしい姿で、突如に颯爽と登場してくれるのです。そして、その芽生えを目の当たりにした途端、まさに「萌え」な感情に誘われます。毎年出てきてくれるのですから、もう顔なじみの親戚のようです（もちろん美味しく頂いてしまいますが…）。

そして、厳しい冬を地中で過ごしたその旺盛な生長力は、一瞬たりとも管理者の見逃しを許さず、うっかり採り忘れれば、1日で食べる時期を逸した巨大なアスパラとなってしまうます。その一筋縄ではいかないところも含めて、なんだか「萌え」な存在なのです。

さて、アスパラガスの和名は、「オランダキジカクシ（阿蘭陀

雉隠）」だそうです。ん？意外に古風な名前。実は、江戸時代に觀賞用として持ち込まれ、明治時代初期から食用栽培されているようで、雉が隠れることができるほど枝葉が生い茂ることに由来しているそうです。なるほど、最近の野菜だと思っていたのでかなり意外でした。その生い茂った枝葉で栄養を溜め込み、翌春の力強い芽吹きにつながるのです。

今年も、様々な地域やまち、組織で、枯草の下に隠れている、アスパラガスのような力強い芽吹き（人やモノ）と出会っていただけることを楽しみにしています。



私の萌え (?)

坂井信行：都市・地域プランニンググループ



これを萌えと言ってよいのか
わからないのですが、趣味的に
関心のあるもの。地図、団地、
トマソン、大阪万博、カメラ、
ミニチュア建物……。こうやって
書き出してみるとオタクという
言葉も連想されそうですが、ア
ニメやフィギュア、アイドル、
ゲームにはほぼ関心がないで
し、飛行機や鉄道などの乗り物
とかにも。

地図。国内外のいろんな都市
の地図や古地図を集めていま
す。地図を見ながら実際のまち
を思い出したり想像したりする
のも楽しいです。古い地図帳を
新旧見比べるために残してい
りもします。つくばの国土地理
院にある地図と測量の科学館に
行ったことがあります。シヨッ
プではマップメモ（地理院の地
図の裏面を使ったメモ帳）を買
いました（もったいなくて使え
ません）。

団地。かつてみんながあこが
れた近代的な住まい。当時の最先
端の建物デザインや住棟表示の
文字の字体などいいですね。
赤羽台団地のスターハウスは登
録有形文化財にもなりました。
千里ニュータウンにもいいもの
がたくさんあったのですが、最
近どんどんなくなっていくのが
残念です。かつて皇太子が視察
したひばりヶ丘団地のペランダ

も見に行きました。

トマソン。まちの中にあつて今
や役に立たなくなってしまうた
もの。まち歩きの際に無意識の
うちに探しています。かつてト
マソンの都市計画版を探すとい
う研究会もやっていたのです
が、なかなか難しかったです。
その時に見つけたもので一番
気に入っているものがあります。
郊外などで造成はされたけれど
も一度も建物が建ったことのな
い土地がたまにあります。これ
れを「純粹造成」と名付けてい
ました。ちなみに、トマソンに
着目したフィールドワークのス
タイルを実践する人を物件派と
いうそうです。

大阪万博。1970年の大阪万
博です。科学技術が豊かな未来
を実現する、とみんなが信じて
いた時代。とんでもない数の
人々が会場を訪れました。あの
頃夢見た「未来」も既にな
つかしくなっています。大阪
万博はいろいろな裏話もたく
さんありますね。会場計画の
話とか、お祭り広場のモダン
ズムの大屋根を突き破った縄
文（太陽の塔）の話とか。創
成期のアルパックも会場計画
に関わっていたので、諸先輩
方のその頃の話も面白いです。
まだまだありますが、一旦これ
ぐらいで。

タイルの魅力にハートがずっきゅーん！

中村孝子：企画政策推進室



マジョリカタイル さらさ西陣

以前にもレターズで紹介して
いますが、銭湯が大好きで、旅
にでかけると必ずといっていい
ほどその地域にあるレトロな銭
湯を探します。銭湯の魅力の必
須アイテムは、唐破風の建物外
観、ペンキ絵、番台、柳行李、
体重計（単位が貫のもの）など
などあげたらキリがありません
が、中でもタイルが大好きです。
ラッキーなことに私が暮らす

京都には、マジョリカタイルの
宝庫といえる船岡温泉やもと銭
湯を活用したカフェ「さらさ西
陣」があり、遠方から友人が来
たら必ず連れていきます。和製
マジョリカタイルが欲しくて仕
方がないのですが、入手
できないのでここにきて
は、ため息をつきながら
眺めています。最近知っ
たのですが、台湾にはマ
ジョリカタイルのある町
並みや博物館「台湾花磚
博物館」まであるそうで、
コロナが終息
したら行こうと
思っています。

また、銭湯に
はタイル絵もあ
ります。これは
絵画の世界で、
一枚一枚が芸術
作品です。なの
で旅に出る前



写真：上 錦水湯（大阪市旭区：廃業）
下 末広湯（大阪市淀川区：廃業）



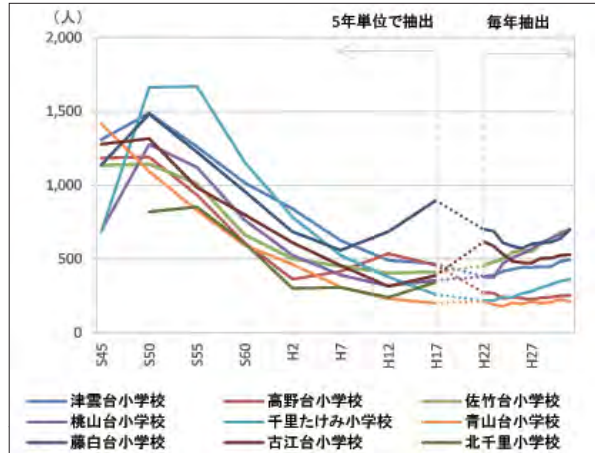
湊湯（石川県能登町）
「九谷栄栄堂」とある

に必ず下調べをします。場合に
よっては、旅の主目的になった
りしています。以前、大阪には、
立派なタイル絵があるお気に入り
の銭湯がいくつかありましたが、
廃業に伴い現在はありませ
ん。同じように日本各地からタ
イル絵は姿を消していると思う
のでこれからも旅は続きます。
他にも泰山タイル、本業タイ
ル、モザイクタイルなど話題は
つきないのですが、長くなりそ
うなので、また次の機会に。
※マジョリカタイル イギリス
で乾式成形法によって製造さ
れ、日本でも明治後期から大正
時代に製造される。

千里ニュータウンが循環するための 公的賃貸住宅の役割を夢想する



竹内和巳：
地域再生デザイングループ



千里ニュータウンの住区の状況やUR賃貸住宅の特徴等に関する調査に取り組んでいます。

日本初の大規模ニュータウンであり、まちびらきからもうすぐ60年が経ちますが、北大阪急行の延伸や千里中央地区センターの再整備の検討など、注目の絶えないまちです。

千里ニュータウンはみどり豊かなオープンスペースが特徴的であり、UR賃貸でも視線の抜けや心地よい建物規模など、魅力的な住環境がつけられています。

一方で、まちとしては課題も発生しています。例えば、住宅地としてのニーズの高さから、公的賃貸の建替えなどを契機と



傾斜地をいかしたUR千里青山台団地の景観

して多くの民間分譲マンションが供給されており、新たな人口流入（それに伴う若年世帯の増加、高齢化率の低下など）が起これば、供給されていない住区との差が非常に大きくなっています。

また、気候変動や技術革新などにより、これからより一層、社会の在り方や暮らし方は加速度的に変化していくことが想定されます。現状の団地の魅力を改めて感じながら、ニュータウンのように開発余地が少ないエリアで将来に渡ってまちが持続するために公的賃貸が果たすべき役割について、考えています。

「いこまスマホサミット 2020」を開催しました



いこまスマホサミット 2020の様子



稲垣和哉：
都市・地域プランニンググループ

こどもがスマホを持つようになって久しく、手のひらいつでも繋がる環境は学校と家庭の境界をますます曖昧にしています。

新しい技術が登場するときはいつもそうですが、様々な恩恵をもたらしてくれる一方で、弊害も生み出しつつあります。

そんな中、「いこまスマホサミット2020ワークショップ開催の支援業務」において、NPO法人奈良地域の学び推進機構の石川千明さんのサポートのもと「いこまスマホサミット2020」を開催しました。「いこまスマホサミット2020」は生駒市内中学校の生徒・保護者・教員を対象として、スマホ

等情報端末の利用の現状を知り、付き合いかたを自ら考える場です。最終的なゴールは各校においてルールをつくることなのですが、その過程を大事にし、今後も継続的に取り組んでいくものとして、今回は各校の課題の把握、解決に向けた取り組み案の発表、意見交換を通して各々の考えを深めました。何のために、どこまでルールを設定すべきかを考えるにあたっては、根拠となるデータをもう少し揃える必要があるだろうということ、つくったルールを周知し理解してもらうには動画が効果的なのではないか、など得るものはあったようです。

頭で分かっているけど、実際に行動に移せないことはよくあります。自発的な行動を生み出すためには「腑に落ちる」必要があると思うのですが、そのポイントとは人それぞれだと思います。そこに至るには、ルールの厳格化だけではなく、技術がもたらす新しい可能性といった視点も含まれていくのだろうと思います。デジタルネイティブ世代がこれからのような答えを導き出すのか楽しみです。

「発酵からつながる滋賀」に取り組んでいます

江藤慎介：

地域産業イノベーショングループ



「発酵からつながる滋賀研究会」報告書より抜粋

滋賀県には、郷土料理である鮒寿司、漬物、味噌、醤油、地酒等の地域資源があり、発酵の食文化があります。滋賀県では、このような「発酵産業」の成長促進化に向けた取組を令和元年度から推進しており、アルパックが支援しています。

成長促進の方向性の研究

令和元年度は、発酵からつながる滋賀研究会を立ち上げ、滋賀県が目指すべき方向性を研究しました。県内の発酵産業のすそ野は広く、特に食の分野が多いこと、滋賀県では小規模事業者が多いこと、びわ湖と周辺の自然を基にした淡水の発酵文化は滋賀独自であること等、滋賀県の特徴が見えてくる一方、現在は発酵ブームで発酵食の競争環境が熾烈となっています。

そこで、滋賀県ではびわ湖を中心とした多様な生態系を背景として、各産業が「発酵産業」としてつながっている状態が分かりやすいことから「発酵からつながる滋賀」をコンセプトに掲げ、社会的な課題を発酵という切り口でビジネスを通して解決し、発酵（関連）産業規模が拡大することと「持続可能な社会の実現」している将来ビジョンを設定し、取組を進めていくことを提言しました。

プラットフォームの設立

研究会で取りまとめた報告書を踏まえ、令和3年1月に「発酵からつながる滋賀プラットフォーム」を設立しました。滋賀県の発酵産業の成長促進化に関心のある方ならどなた



オンライン勉強会の様子

でも参加できるもので、主にFacebookグループで情報発信・意見交換をしています。現在、既に200名以上の方が参加されています。

オンライン勉強会の開催

プラットフォームの取組の一つとして、ウィズコロナ／ポストコロナ時代の発酵産業に必要な知識や事例等を学ぶオンライン勉強会を開催しています。令和2年度は合計3回の勉強会を開催し、発酵デザイナー小倉ヒラクさん、(株)ファーマンステーション酒井里奈さん、D&DEPARTMENT PROJECT 相馬夕輝さんを講師としてお招きしました。『さばずしのうた』を作り、歌って踊ることが認知度向上につながるのではないかと「学びと体験」な体験を行う発酵ツーリズムを通じて、新たな関係性が構築されるのではないかと、いった気づきが生まれ、令和3年度以降の取組につながりそうです。

『滋賀発酵商店』の開設

「発酵からつながる滋賀」の取組を進める中で最大の課題は、滋賀県の発酵産業の認知度向上です。発酵が好きな人は関心を寄せるものの、関心がない人は見向きもしない。一方でコロナ禍によりデジタルシフトが加速し、社会潮流ではモノ消費・コト消費からトキ消費・イミ消費へと価値観が転換しています。このため、令和2年度にはモデル事業とし

て、滋賀県の発酵の魅力新しい側面から紹介するウェブコンテンツ『滋賀発酵商店』を制作しました(株)KUMAとの連携。

今後の展望について

滋賀県の発酵産業の認知度が向上しても、新しいプロジェクトが生まれていなければファンは生まれません。このため、令和3年度は多様なプロジェクトを実践していく予定です。

※この業務は、高野隆嗣、武藤健司、並びに地域再生デザイングループの浅田麻記子、小川直史も担当しています。



滋賀発酵商店 (<https://shiga-hakko-shoten.jp/>)

食品ロス削減推進計画を策定しました



大東市のスーパーの食品ロス（当社調査結果）

大東市のスーパーの食品ロス（当社調査結果）
法
の制定を踏ま
えた計画が、先

全国で、まだ食べることができる食品が家庭や事業所から毎日大量に廃棄されていることが問題となっています。

このまだ食べられるのに廃棄されている「食品ロス」は、国際的にも問題となっており、2015年の国連持続可能な開発サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」で掲げられた「持続可能な開発目標」(SDGs)でも、「目標12 持続可能な生産消費形態を確保する」の中に「ターゲット12・3」として食品ロスの削減が取り上げられています。ここでは、廃棄が少なくなるように買うというだけでなく、国際的な流通や、生産・消費スタイルの変革までを視野に入れた裾野の大きい取組となっています。

一方、国内でも食品ロス削減の取組として啓発を中心とした様々な取組が実施されています。その一つとして「食品ロス」を削減することを目的とした「食品ロスの削減の推進に関する法律」が2019年に施行されました。同法では自治体に食品ロス削減推進計画を策定する努力義務を課しており、この春、同

進的な自治体を中心に策定されています。この度、大阪府大東市で計画策定に関わりましたので、以下にご紹介します。

大東市は大阪市の北東に位置する人口12万、械や金属など製造業の盛んな都市です。今回、一般廃棄物処理基本計画の中に、食品ロス削減推進計画を組み入れました。

計画の策定に当たっては、市民アンケートで食品ロスの発生状況や家庭での食品ロス削減の取組などを把握したほか、家庭やスーパー・コンビニ・飲食店等の事業所のごみを調査し、ごみ中に占める食品ロスの割合等を把握しました。目標設定や進捗管理用の指標の設定等に調査結果を活用しています。

食品ロスや食品廃棄物は、古くて新しい問題です。アルパックでは長年にわたり食品廃棄物について調査しており、大東市では10年前にも調査をしています。その結果を見ると、スーパー等でごみ中の食品廃棄物の割合はどちらも6割弱で変わりませんでした。ごみの全体量は減っているのですが、今後継続して食品ロス削減に取り組む必要があります。

（当業務は他に伊藤栄俊と桜井寛が担当しました）

過去のレターズ記事でも少しご紹介させていただきましたが、約1年半前から日本で働いているベトナム人コミュニティを中心としたキャリア形成支援NPO法人VPJ（Vietnamese Professionals in Japan）の代表をさせていただいています。

VPJでは、これまで、20代の若手ベトナム社会人向けのキャリアアットークや卒業間際の学生向けの面接トレーニング、同業種・異業種交流会等数多くのイベントを開催、一緒に協力しみんなでキャリアアップすることを目指しながら活動が続けております。

コロナ過のこころケア～VPJのポッドキャスト

ホアン ゴック チャン：

地域産業イノベーショングループ

しかし、新型コロナウイルスが世界中に猛烈を振るっている中、日本で生活しているベトナム人も多かれ少なかれ影響を受けています。在留期間が終えても帰国できず、卒業を迎えているものの就職の目途が立たなく、自粛で人と会えなくなったり、人とのつながりが希薄になったりする等、生活が一変し、精神的ストレスが増える人々が多く見られます。一方、VPJとしては対面式イベントを次々と中止せざるを得なくなり、活動範囲が狭められてしまいました。

そういう状況の中、我々は従来の通りのキャリアケアからこころのケアをしたいと考え、オリジナルのポッドキャスト番組

（Podcast）を作りたいという発想が芽生えました。VPJのポッドキャストでは悩みや相談ごとに耳を傾けると共に、日本で頑張っているベトナム人にスポットライトを当て、多くのベトナム人が通勤中の隙間時間に聞いていただくことでコミュニティをインスパイア出来ればと期待しています。

現在、リソースの限界により、ベトナム語コンテンツのみ制作しておりますが、近い将来に出来れば日本人の皆さんに聞いていただけるよう日本語コンテンツを用意したいと考えています。

URL: <https://podcasts.apple.com/jp/podcast/vpj/id1500224198>

VPJでは、これまで、20代の若手ベトナム社会人向けのキャリアアットークや卒業間際の学生向けの面接トレーニング、同業種・異業種交流会等数多くのイベントを開催、一緒に協力しみんなでキャリアアップすることを目指しながら活動が続けております。



コロナ前（2019年）に開催した Viet Tech Day Tokyo

篠山城下町で土蔵の再生に取り組みました

和田裕介：

建築プランニング・デザイングループ



再生後の外観

篠山城下町は、篠山城跡、武家屋敷群、妻入商家群が一体となった風情ある風景が、地区の歴史的風致をつくります。

阪神間から車で約一時間、兵庫県中東部に位置し、2004年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

アルパックでは、保存対策調査から重伝建地区選定の支援、まちなみ保存会の支援と約20年間、地区のまちづくりのお手伝いを続けるとともに、設計監理者という立場で、古民家再生に携わってきました。

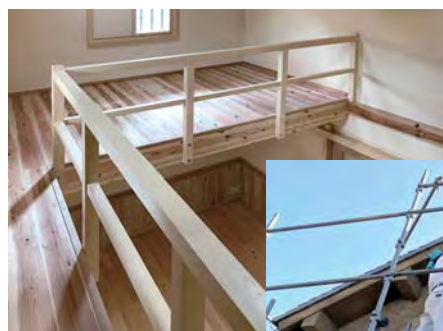
令和2年度は町家の土蔵を再生しました。この土蔵は、銀行として利用されていた町家のもので、間口が2間、奥行5間と、一般的なサイズの倍近くの面積で、篠山城下町でも大型の部類に入ります。



再生前の外観

再生前は、経年による傷みが各所に見られました。屋根瓦は劣化やずれがひどく、雨漏りの痕跡も確認できました。壁の左官仕上は剥落し、多くが波鉄板に置き換わっています。構造材の腐朽もありました。古民家再生に度々登場するメンバーは、大工さん、瓦屋さん、左官屋さん、建具屋さんです。今回も、このメンバーを中心に工事を進めます。まずは屋根の修理です。古瓦や葺土を丁寧撤去し、新しい瓦を葺きます。昔の瓦は小振りなサイズで、軒瓦や袖瓦の垂れや熨斗瓦の厚みも薄くなっています。そこで、64版という一回り小さい瓦を採用し、役物は特別に焼いた「篠山型」瓦を使って仕上げます。続いて壁の修理です。土を何度も塗りつけて修理した厚みのあ

る土蔵の荒壁に、「灰中塗」という、ざらりとした手触りの、ほんのり土色の砂漆喰のような、丹波地域特有の仕上材を塗りま



リノベされた室内



壁と軒裏の修理の様子

す。他に漆喰塗の蔵戸の修理や、腐朽軸組の根継や取換え、構造補強も行い、内部も居室としてリノベーションすることで土蔵の再生は完成です。

工事は、昔ながらの工法を使うことが多く複数の工種を重ねることも難しいので、どうしても時間と手間がかかります。それでも、毎年少しずつながら、伝統的建造物の丁寧な修理が積み重なることで確実に町並みの魅力と質の高まりを実感できます。

お知らせ

ISO マークの取得について

近江篤：

総務部

この度、アルパックは、環境マネジメントシステム【ISO14001：2015 (ISO14001：2015)】と情報セキュリティマネジメントシステム【ISO27001：2014 (ISO/IEC27001：2013)】の認証を取得しました。

ISO 認証を取得するということは、「顧客の信頼」を得るということです。組織の情報セキュリティや環境活動を管理するための仕組み（マネジメントシステム）を確立し、組織の責任と権限が明確であることを意味します。

これからもアルパックでは、持続可能な地域社会・地域環境・地域経済を一体的につくっていく「持続可能な地域づくり」、地域ごとの特徴を踏まえた「地域づくりの多様なモデルの創造」を目指して、日本の地域づくりをリードしていくことをミッションとし、マネジメントシステムの維持向上を努めていきます。

今後とも、より一層信頼される企業として目指してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



「緑あふれる癒しの空間」

大阪事務所 前江田晴香

大阪事務所は2018年7月、北には適塾・西には現存する木造の園舎としては日本最古の大阪市立愛珠幼稚園と由緒ある建物に囲まれた場所へ移転しました。

事務所内にはサポートスタッフの皆さんに手厚く育てられている観葉植物がスクスク育っています。棚の上や窓など殺風景な場所に緑がたくさんあり、癒しの空間が広がっています。入口奥の打合せスペースは、日当たりも良く植物には絶好の環境のようで、大小の植物が良く育っています。その中でも多肉植物「コノフィツム」には昨年3度黄色く小さなかawaii花が咲きました。その隣にあるのは同じく多肉植物の「リトープス」。こちらは4cmほどの白い花が咲くそうです。この頃咲いていないようなので咲くのを楽しみに観察をしていこうと思っています。

大阪事務所へお越しの際は、ぜひご覧になって下さい。



「第1号ビールびらきの開催」

京都事務所 小川直史

昨年12月「第1回ビールびらき」と称して、滋賀営業所で醸造していた試作第1号のビールを味わいました。参加したメンバーからは、「市販のビールより旨い！」なんていう声があがりました。どちらが美味しいかはさておき、市販と今回のビールの大きな違いは「酵母が活着しているかどうか」です。いわゆる市販のビールは酵母を取り除きます。酵母があると、酵母が麦汁に含まれる糖分をどんどん食べて、アルコールと炭酸ガスをどんどん出して（発酵が進むということ）、味が変わってしまうからです。一方、今回造ったビールは酵母が活着しているので、発酵が進みます。発酵が進んでいくことを「熟成」と言います。（クラフトビールといわれるものはたいてい酵母が活着しています。なので賞味期限も短いです。）出来立て（11月）の時にはあまり感じられなかったホップの香りや飲みごたえが、12月には感じられました。熟成おそるべしです。



事務所だより

適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

30回 コロナ禍に考える食文化と商業のこれから

2021年
1月15日

講師 (株) ケイオス 代表 澤田充氏

第30回は澤田充氏をお招きし、コロナ禍における、商業や食文化のあり方についてお話しいただきました。

コロナ禍はこれから起こる変化を早めることになり、テレワークが進むことでオフィスは「ハレの場」となり、なんとなく行くお店がつぶれ、人気のあるお店だけが生き残っています。

澤田さんによると、流行を追い求めるほど、店舗は同質化していくため、顧客が付きにくくなるため、生き残るためには、真似できない世界観とヒストリーのある事業を展開する「超個別化」が必要とのこと。また、飲食の世界の最先端の動きとして、技術革新を取り入れたフードテック革命が起こっており、「出張シェフ」など、働き手が場所から解放され始めているそうです。

世の中の流れを理解しながら、自身の愛するお店にお金を落とす活動を継続したいと思います。（竹内和巳）



31回 1階から始まるまちづくり

2021年
2月26日講師 (株) グランドレベル
代表取締役社長 田中元子氏

第31回は、(株) グランドレベル田中元子氏をお招きし、建物の1階、広場や公園など目の高さに広がるグランドレベルのまちづくりについてお話しいただきました。

手作りの可動式屋台を引きながら、無料でコーヒーをふるまう「パーソナル屋台」の活動をきっかけに、好きなことや趣味を通じて生み出される「マイパブリック（私設の公民館）」がまちに展開されることで、まちがもっと楽しくなるのではないかと提唱されています。築55年の空きビルをリノベーションした「喫茶ランドリー」では、あまねくすべての人々にとって自由なくつろぎのある空間であるとともに、お客さんが自らイベントを企画・運営するなど自分達のやりたいことが実現する場となっています。

コロナによって人のつながりやまちの姿が変化している中で、公共空間やオープンスペースの活用がさらに加速しています。これからさらに、グランドレベルにおける人々の居場所づくりが求められるのではないかと感じました。（山道未貴）

近況 & イベントのお知らせ

JIA 市民大学講座 2020 まちづくりセミナー

「建築とまちの価値を高めるデザインレビューを考える」を開催しました

塗師木伸介

建築プランニング・デザイングループ

近年、自治体やエリアマネジメント組織による建築物や広告物のデザインマネジメントの取り組みが広がっています。その中でも建築とまちの価値向上のために有効な手法の一つとされる「デザインレビュー」のあり方について JIA 近畿支部都市デザイン研究会主催でセミナーを開催しています。第二回では基調講演として坂井文教授（東京都市大学）に「英国 CABC と建築・都市デザイン」と題したお話を頂き、その後、元行政職員、建築家を交え、ディスカッションを行いました。

英国において CABC は政府の建設投資のデザインの質を担保するための助言、技術支援を目的に 1999 年に設立された公的機関です。活動内容としては開発等に関するデザインレビューを始め、調査研究、デザイン教育等の多岐に渡ります。

デザインレビューにおいては様々な専門家がレビューアーとして参加し、指摘を行います。実際に行われた事例では設計者に対し、色彩等の表層のデザインに留まらない本



質的な内容が指摘されます。

ディスカッションでは、デザインという明確な答えが難しい分野において、明確な指針がないと行政は強い権限を発揮しにくいという意見や、設計者としてレビューアーのバックボーンが見えない状態では裁量が大きい指導は納得しにくいのではとの話がありました。CABC においては事前にレビューの視点、論点を明確に示す他、それまでの事例を公表する等、設計者とレビューアーが共通認識を持ってレビューに臨むことができるように工夫がされています。また、調査研究活動の成果として冊子を年に複数回発行する等、より良い建築環境、都市デザインのためにレビューをする側も知識を蓄え、発信しています。日本においても CABC の手法を参考に、レビューに関わる双方が議論をするための共通の土台をつくっていくことが大切であると考えられます。

本研究会でより良いデザインレビューのあり方を探るために、引き続きセミナーや研究会を開催していく予定です（本活動については馬場、坂井、太田も事務局として参加しています）。

セミナー報告記録

<http://www.jia.or.jp/kinki/pickup/13133.html>

第 14 回 CITÉ まちづくりシンポジウム『アフターコロナの大阪が目指すべきもの』を開催しました

羽田拓也

地域再生デザイングループ

毎年のテーマに沿ったトークセッションのとりまとめの場としてのシンポジウムを開催となりました。

CITÉ さろんがテーマを設定して開催しているトークセッションとシンポジウム。今年は「アフターコロナのまちづくり」をテーマにオンラインで開催しており、緊急事態宣言下ということでシンポジウムもオンラインでの開催となりました。

基調講演では、国土交通省まちづくり推進課長の光安達也さんに「アフターコロナのまちづくりについて」として、国土交通省がとりまとめられた「新型コロナ危機を契機としたまちづくりの方向性」で論点となっている内容などを、コンパクトシティ化などこれまでに国が進めてきた取り組み等とあわせてお話いただきました。

パネルディスカッションでは、大阪府立大学の武田重昭先生をコーディネーターに、トークセッションに登壇いただいた MEZZANINE 編集長の吹田良平さんと計量計画研究所理事の牧村和彦さんに加え、大阪市都市計画局開発調整部長の上溝憲郎さんにパネリストとして、アフターコロナにおける大阪が目指すべき都市づくりの方向性についてご議論いただきました。

「大都市には厳しいご時世ながら、この転換期をチャンスに」や「自分のまちが好きで誇りを持つ人の多い大阪のようなまちから未来は生まれる」といった、前向きな示唆に富むご意見をいただきました。また、オンラインということでオーディエンス側でも関西以外の方にも参加いただいたことで広くこれからの大阪や都市そのものを考える良いきっかけとなりました。

羽田拓也：
地域再生デザイングループ

火を囲み、人の輪が 広がるまちの広場

昨年10月に本格オープンした茨木市市民会館跡地のIBALAB®広場（イバラバ広場）では、焚き火を通した人の輪が広がっています。

広場で営業するカフェ「いばらき コモンファクトリー」の利用とあわせて、小さなお子さんを連れたお母さん同士が会話を楽しんだり、散歩途中のお年寄りが休憩がてら時間を過ごしたり、近隣の小中学生が放課

後に立ち寄りたりと、思い思いの普段使いをして茨木のまちなかを楽しんでおられます。

この広場では、一般的な公園では禁止事項にされていることもやれるようにしようということで、オープンと並行して使い方のルールを検討し、音楽の演奏やイベント実施のほか、一部のエリアではストリートスポーツやボール遊びが楽しめる広場となっています。

なかでも一定のルールのもと火の使用が可能であることが特徴的です。その特徴を活かすべく、広場にぎわいづくりを担う広場運営者でもあるいばらきコモンファクトリーが主催となって、1月末から「焚き火を囲む会」をスタートしました。店主の藤井茂男さんがテーマを設定し、テーマに沿った市内で事業や活動を行うキーマンをゲストに、毎回10数人が広場の2時間ほどの語らいの場として毎週土曜日17時30分から開催されています。

気候が良い時期ならいざしらず、寒い中、屋外での2時間、と聞くと

「そんなに長時間外にはいられない」と一瞬考えてしまいますが、そこは一見ならぬ「体験」の価値あり。火や薪が燃える様子を眺めながら話をしていけると不思議と時間が経っています。

また、テーマに沿って限られた人が輪を囲んでいると閉鎖的に入りにくい雰囲気になりがちですが、みんなが囲む火に誘われるかのように、飛び入りでフラッと輪に入る人もおられます。また、やや薄暗いことがかえって参加者も肩肘張らず、テーマに対して率直な疑問や意見を交わせるなど、ある程度の領域感がありながらも閉鎖的にはならないやわらかい空間をつくっています。

だんだんと暖かくなってきていますが（暑さには変わるのもすぐなのですが）、暑さにならぬ「焚き火」の会は続いていくとのこと。ゆるやかに人と人がつながる広場の存在がまちなかの価値につながっていく、いいなと思います。



表紙写真：神戸モトコーで見つけた店先のディスプレイ（撮影 坂井信行）

「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所

〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所

〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所

〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所

〒810-0802 (株) よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

滋賀営業所

〒527-0012 東近江市八日市本町9-14 TEL(0748)36-2065 FAX(0748)36-2168

ホーチミン（ベトナム）No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward, District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitoペーパーを使用しています。